

## イメージ力がないと解けない問題

事前に練習できない問題を出す傾向が年々強まっています。次ページの出題例を見てください。

問題1は「先生が弾くピアノの音（激しいリズムの音楽）を聞いて、同じ様子のもので○をつけましょう」という問題です。「激しいリズムのピアノ音」から何をイメージするか。雪が降っているときか、雨がザアザア降っているときか、お日様が照っているときか、曇っているときか。意外とむずかしい問題です。

最近の住宅はしっかりした構造の建物になっていますから、雨音が聞こえないかもしれません。そうすると、この種の問題は、普段から子どものイメージ力を育てるような働きかけをしているかどうかが問われているということになります。雨が降っている日に、「雨がザアザア降っているね」とか「今日の雨はしとしと降っているね」といった会話が親子の間でかわされていれば簡単に解ける問題です。雪が降らない地域もありますから、雪が「しんしんと降る」という情景をイメージさせるには昔話などを話して聞かせるしか方法がありません。

問題2は、「(ピアノ、太鼓、タンバリンが順に鳴って)鳴らなかつたものに○をつけましょう」という問題です。保育園や幼稚園で使ったことがあるはずですからむずかしい問題ではありませんが、それぞれの楽器の音を聞き分けることができないと解けません。これらの音が聞き分けられない場合、幼児期からの「難聴」が原因というケースがたまにあります。注意してください。

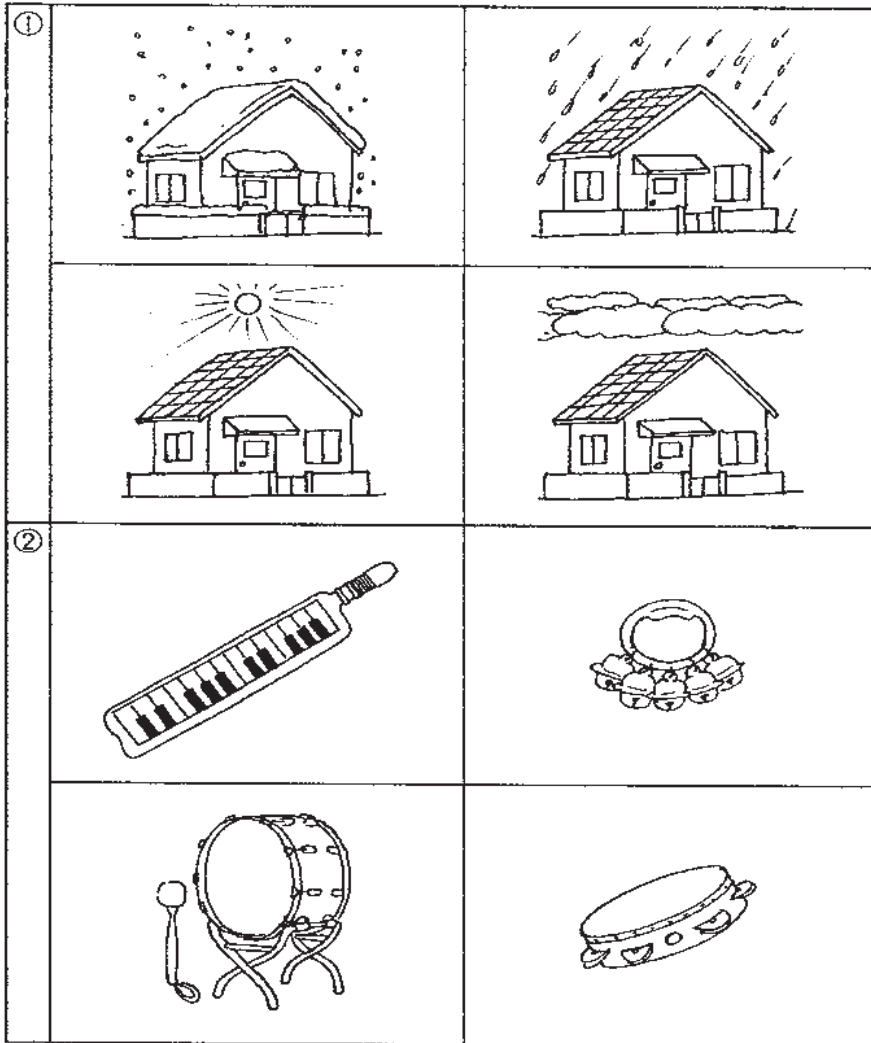
出題例

「先生が弾くピアノの音（激しいリズムの音楽）を聞いて、同じ様子のものに○をつけましょう」

問題1 先生が弾くピアノの音（激しいリズムの音楽）を聞いて、同じ様子のもんに○をつけましょう

問題1（ピアノカ、太鼓、タンバリンが順に鳴って）鳴らなかったものに○をつけましょう

【音の聞き取り】



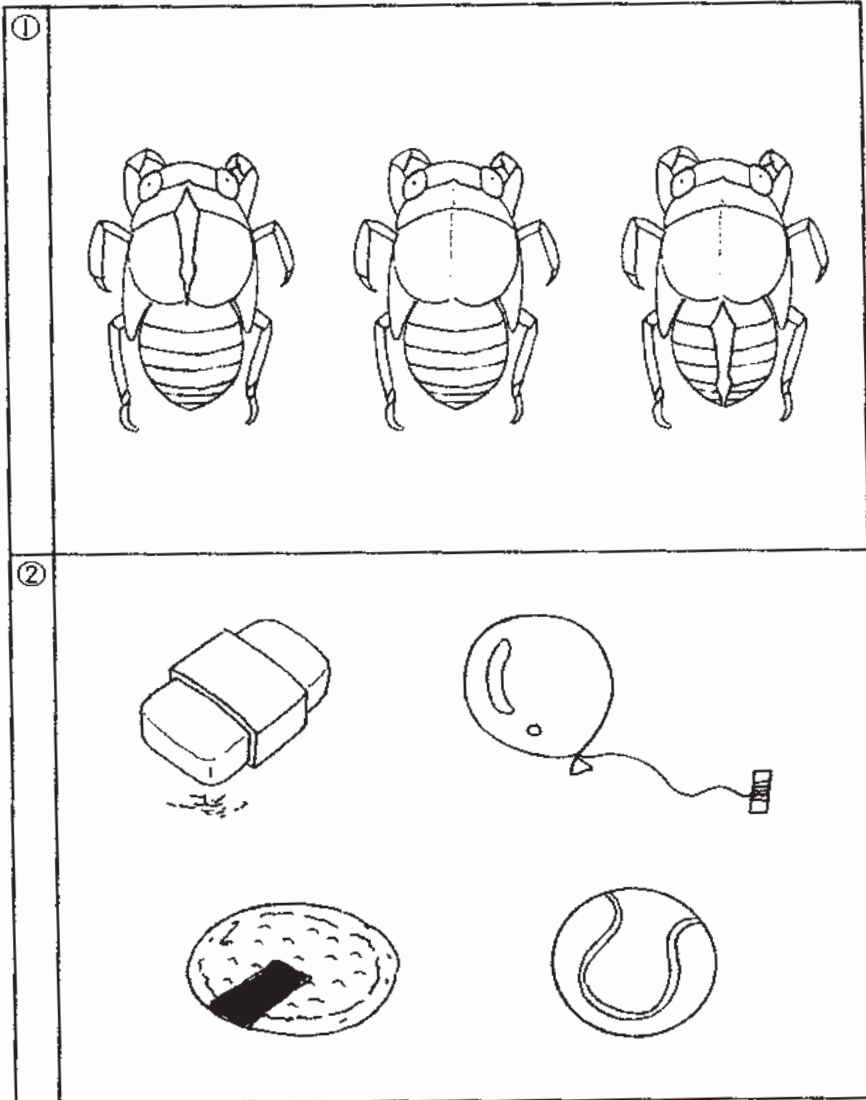
出題例

机の上にセミの抜け殻が置いてある。

問題1 上からみるとどれでしょう。○をしましょう。

問題2 触ってみた感じが同じものに○をしましょう。

【常識】



1章 / 小学校受験 こういう問題が出る

問題2の「触って見た感じが同じものに○をしましょう」は、実際にセミの抜け殻を触って見た経験がないと答えられません。図鑑だけの知識では答えられないという問題を意識的に盛り込んだことはたしかでしょう。

イチヨウの葉の問題でも、どんな模様かは実際に葉を手にとって観察しなければわかりにくいでしょう。イチヨウの葉は秋になると黄色に変わること、イチヨウの木には実（銀杏）がつくこと、その実は食べられることを知っている子が望ましいと言うのが出題者の意図です。

これが風に吹かれて遠くに飛んで行って、そこで芽を出すんだよ」などと教えてあげる親であってほしいものです。

秋から冬にかけて公園に行くと松ぼっくりが落ちていることがあります。「これ、何？」と子どもから聞かれたときに、「それは松ぼっくりと言って、松の木の実だよ。中には羽をつけた小さな種があつて、これが風に吹かれて遠くに飛んで行って、そこで芽を出すんだよ」などと教えてあげる親であってほしいものです。

松ぼっくりはクリスマス木のドア飾りなどにもよく使われていること、また、雨の日や夕方になると松ぼっくりは傘を閉じているけれど、太陽に当たると傘が開くことなども教えてあげると、子どもの興味を引くと思います。

バケツに入っているザリガニを別の容器に移すという問題を出した学校があります。手でじかに触らなくてもいいという指示がありました。触れたほうがいいに決まっています。くどいかもしれませんが、図鑑だけの知識では入試に対応できません。学校側は、そういう準備では答えられないような問題を意識的に出しているのです。実物を見せ、触らせてください。

## 大人の知識レベルが要求される常識問題

エレベータに乗ると、ほとんどの子どもが操作ボタンに興味を示して触ろうとしますが、お母さんは子どもが操作ボタンに触らないように注意していると思います。面白半分にいじり回して故障したら困ると考えてのことです。「このボタンは何?」「ここを押したらどうなるの?」と子どもが聞けば、「子どもは知らなくてもいいの!」と叱っていたかもしれないかもしれません。しかし、このエレベータの操作ボタンに関する知識が出題されたケースがあります(次ページ)。「子どもは知らなくてもいいの!」と叱られていた子どもには答えられませんね。

子どもたちは、小学校に入ったら一人で通学しなければなりません。自宅から最寄り駅までバスを利用して、さらにいくつかの駅を乗り換えなければ学校に着かないという子どももいます。私学の場合、通学時間が1時間以上かかるというケースはそう珍しいことではありません。大きな駅の中は子どもにとっては迷路みたいなものでしょう。当然、エレベータの操作ボタンの使い方を知っておく必要があります。エレベータの操作ボタンは「子どもは知らなくてもいいの!」ではなく、知らなければいけない必備知識なのです。

子どもが一人で通学することになったら:子どもを連れて外出したときは、そういう目でいろいろなことをチェックしてください。交差点の信号の読み方、歩行者専用レーンのほか、駅やデパートの中にも「乗り換え案内」「トイレ」「非常口」「総合案内」などたくさんさんの「案内標識」があります。幼児や子ども向けの標識はありません。大人と同じ常識が求められているのです。

### 出題例

下の絵はエレベータの中のボタンです。人が乗ってきているときに押しはいけないボタンはどれですか。○を付けましょう。



教えておきたい  
いろいろな標識



1章 / 小学校受験 こういう問題が出る

## 語彙力の強化は能力開発の起爆剤になる

文字が書ける・読めるという力は、子どものあらゆる能力を引き出す起爆力になると思っています。絵本が読めるということは子どもの脳を刺激します。想像力や空想力が広がります。語彙もどんどん増えます。子どもとの会話の中で、「こんなむずかしい言い回しをどこで覚えたのか」とびつくりすることも少なくないと思います。

お子さんとの会話を思い出してみてください。4歳5歳になっているのに話しかけても反応が鈍い、「うん」とか「ああ」としか言わない、口をついて出てくる言葉は「お水」「ご飯」「テレビ」など単語ばかり……という場合、性格的に「口が遅い」とか「男の子はそんなもの」というより、語彙が不足している可能性もあります。

いろいろと話したいことがいっぱいあっても、言葉が不足しているのです。そのうち話せるようになる……たしかに早いか遅いかの違いかもしれませんが、幼児でも文字を「読める・書ける」のですから、そのうち話せるようになる、と待つのはもったいないのではないのでしょうか。

小学校入試で、「雨の中を傘をさしている女の子の絵を見て、お話をつくってください」という問題がありました。子どもの語彙力や想像力、説明力などを知りたいのが狙いでしょう。

「雨が降っていて、女の子が傘をさしています」

と答えた子どもと、次のような話をとっさに創作できる子の場合、わが子はどちらの子どもでもあってもほしいと思いますか。

「友だちのおうちに遊びに行くときは雨は降っていませんでした。でも、お母さんは夕方から雨が降るかもしれないから傘をもって行きなさいと言いました。お友達の家から帰るとき、雨がザアザア降って



いました。ちょっと怖かったけれど、おうちまで走って帰りました。玄関の前でお母さんが待っていてくれました」

語彙力の豊かな子というのは、脳の中の回路が活発に動いているのかもしれませんが。いろいろな言葉を使って話せるということがとてもうれしくて、いつも目がキラキラ輝いています。試験官の先生方の目には、「教え甲斐のある子」と映るのではないのでしょうか。小学校受験であれば、当然、有利ですね。

2歳から文字の「読み」、3歳から「書き」を教えるのは早すぎるのではないか、という考え方もあります。早期教育の功罪がどうこうとむずかしいことはわかりませんが、幼児というのは、いろいろなことを知りたがっています。まだ目が見えない頃から音のする方向に顔を向けようとしています。そのうち何でも手で触ったり、口でなめたりします。見えるもの、手に触れるもの、音がするもの、においがするもの……ありとあらゆるものに関心を示します。

たまたま「知りたいという欲求」の対象が文字であったとしても、「それはダメ、小学校に入ってから覚えるのよ」とブレイキをかけたほうがいいのか。私はそうは思いません。年齢に関係なく、興味を示したり、知りたがっているものがあれば教えてあげる、それが基本的な指導方針です。この三十数年、この考え方で子ども達を指導してきた結果、たとえば、年長児でも前ページのような作文を書けるようになるのです。





## 豊かな語彙を生み出す「辞書引き」指導

京都きさら学園では、年中児から「辞書引き」を積極的に勧めています。使用する辞書は、学習国語新辞典（「小学館刊」）。1万90000字収録。学習漢字1006字は「筆順」つき。小学生・中学生向けのレベルですが、京都きさら学園では4歳児から使用させています。

授業中、たとえば、「鴨（かも）」の話が出たようなときは、「鴨はどういう鳥か、辞書で調べてみよう」と言つて、辞書を引かせます。家庭でも、初めて聞く言葉、聞いたことはあつても意味がわからない言葉が出たときは、すぐ辞書を引くようにさせてほしいとお願いしています。

辞書で言葉を引いたときは、そのページに付箋をつけて、言葉と数字を書かせます。数字は辞書で調べた言葉の数です。5000も付箋がついた子もいます。

また、辞書で「雨」という言葉を引いた場合、一つの言葉だけではなく、「雨上がり」や「雨降つて地固まる」「雨模様」など関連した言葉にも目を通すように教えています。前後のページを見ると、「あま」という読みどころに、「雨足」「雨傘」「雨具」「雨雲」「雨ごい」「雨水」「雨宿り」など、「雨」にかかわる言葉がたくさんあることに気づきます。

新しい言葉に出会ったときに、意味がわからない言葉を辞書で引くという習慣が身に付いた子の場合、使える語彙量は圧倒的に多くなります。単語だけでなく、いろいろな「言い回し」も覚えます。調べた言葉だけでなく、たとえば、「賀茂（川）」のように、同じ音でも意味がまったく違う言葉があることを知ります。テレビの前や台所に辞書を1冊置いて、まず、ご両親が辞書を利用してください。子どもは必ずマネをします。

